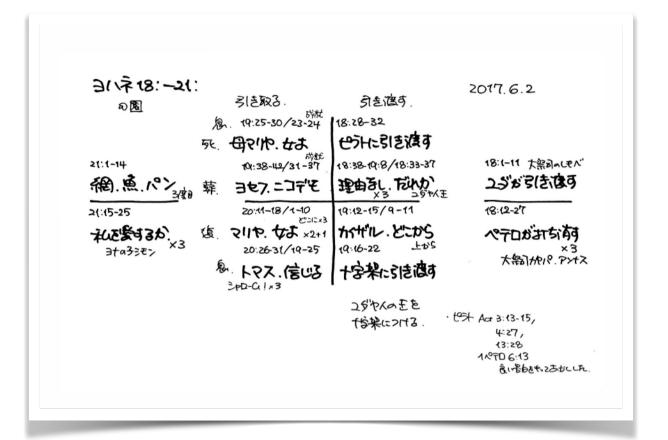


ヨハネ福音書 18-21章



ヨハネ福音書の18章から21章。

18章から最後までが一つの段落であろうというふうに今回分析をし直しました。最初のユダが引き渡す、ペテロが打ち消すというところと、最後の魚とパンを食べるところ、それと私を愛しますかという事を3回言うところ、ここが並行したところに囲まれているのかなということですね。最初の弟子たちが引き渡す、そして復活したイエスと従うことを確かめる。愛することを確かめるというのが最初と最後。これは園での話ということですね。園がありましたというところから始まります。最後も園で葬られて、園のところにありますというところで終わっていきますよね。

真ん中が2つに分かれます。こちら(表中央右側)があの引き渡す方と、(左側)死んで葬られて復活するという側と2つに分かれます。ユダが引き渡して、大祭司カヤパ、アンナスのところに引き渡たされた後に、今度はピラトに引き渡されるというのが4つの段落ですね。ピラトに引き渡す。そして証言するのですね。ピラトにユダヤ人の王なのかと聞かれて答える。それに対して何の罪もない。ここは告訴理由がないという意味の罪はないということですね。告訴理由は無いと3度言って、それで、それに対して叫んで「十字架、十字架、十字架に付けるが良い」ということを話しますね。もう一度今度は「どこから来たのか」ということを言って、「上からです」と。「誰なのか」、「どこからなのか」、そして「イエスではないカイザルの王だ」という事を言って、「十字架、十字架」というところです。「見よ、この人だ」ということと、「見よ、これがあなた方の王だ」という宣言に対しての応答ということになっていますね。十字架にいよいよ

引き渡してイエスを引き取って、ユダヤ人の王として十字架にかけますというところまで。これは引き渡すという段落です。

そして、引き渡しましたと言って、引き渡されて十字架かけられるところですけれども、今度マリヤが出てくる。ヨセフとニコデモが出てくる。またマグダラのマリヤが出てくる。デドモと呼ばれるトマスの話とということで、弟子、ヨハネ福音書の最初の方に出ていた人達がまた出てくるという感じですかね。そのところでは、聖書に書かれた事が成就しましたという意味で、この着物の話、骨が折られない。これも、聖書の言葉が成就すると。どちらも詩篇ですよね。その成就する時が来て、時が来ました。息を引き取る。最後のところで今度、もう一度息を吹きかけて聖霊を受けよと。息がここ(19:30)とここ(20:22)でも並行しているというところですね。

「女よ」という言い方は、カナの婚礼の時に「女よ、私の時はまだです」(19:26)という言い方があります。それとこの20章(13)のところで、「女よ」とマグダラのマリヤの方に言いますね。「女よ、なぜ泣いてるのか」という箇所。もう一箇所大切なのが、サマリアの女のところで、「女よ」という言い方をします。このマリヤが見に行って、弟子たちの所に行ってこの人ですかというようなことを報告するというようなのもサマリヤの女の話に似ているところだろうということです。他にもあると思いますが、それはまた別に見たいと思います。

ここ(19:39)でニコデモが出てきますね。ニコデモの話も今度このデドモと呼ばれるトマスのところで(20:24-)、「イエスが神の子キリストであると信じるためにイエスの名によって命を得るためである」これはニコデモの新しく生まれるというところです。ヨハネの3章のニコデモ、4章のサマリヤいうところは、この死と復活のところのストーリーの背景にどうも現れているようです。

3回ペテロが打ち消して、3回愛しますというふうにいますけれども、マリヤよと、マリヤに対して「女よ」と呼びかけるのも、「女よ、なぜ泣いているのか」、「なぜ泣いているのかマリヤよ」とここも3度話しかけますね。

それと、安かれ、「シャローム」ですね。シャロームも3度ここで言われています。「愛するのか」も3度なんですけれども、よみがえった後に3度現れましたということで、3回、3回というのも一致しているところだというように思われますね。

ピラトは何者なのかということは、他のマタイとルカにも書いてありますけれども、使徒行伝の中に、ペテロが証言する時に、ピラトが出てきます。その後にすぐ大祭司カヤパ、アンナスも集まっているところで、信じている人たちが祈るところにも、ピラトが出てきます。パウロの証の中にも、ピラトが出てきます。第1ペテロ6の13で、「素晴らしい告白をもって証されたイエス」というところにも「ピラトの前で」というふうに出てくる。このピラトの話は、使徒行伝の証明の中で重要になっている「素晴らしい告白をもって証をしている」と言った時には、特にこの「ユダヤ人の王である、この世の国ではない。私の国はこの世の国ではない。天から来た新しい国を作る、その王である」ということと、「上から、天から来た神の子である」ということを証明しているというところだと思います。

細かいところで言うと、ペテロが庭で否定しているところで、炭火を起こしみたいなことがありますね。漁に出たあと炭火を起こして魚をのせる。こういうところも並行しているものだと思いますので、もう少し分析する必要があると思います。

裏切るというのは、特別に裏切るという言葉じゃなくて、「引き渡す」というのが裏 切るというふうに訳されていますので、この中全体でイエスを引き渡したユダというこ とですから、裏切るという意味も含めて「引き渡す」というのが全体のテーマのキーワードになっていますね。それで引き渡したのに対して、「引き取る」と。ヘブライ語が「引き」というのが強調されているかどうかは全然分かりませんけど、日本語だと「引き渡す」と「引き取る」というように、この並行も見えますね。

不思議な「イエスが愛しておられた弟子が」というのが何度も出てきますね。イエスが愛しておられた弟子とという言い方が何度も出てきますね。ヨハネが自分のことを「イエスの愛しておられた弟子が」というふうに言うのも何度も出てきて、ペテロが大祭司の中庭にいる時にもヨハネがいますし、最後もヨハネがいますし、ヨハネはここでペテロと会話しているというところもあります。イエスが愛しておられた弟子ということ言うと、ラザロのことも思い出さなきゃいけないと思ったりしますけれども、まだもう少し全体を見て、特にサマリやの女とのつながりというのも見ていくことになると思います。